



# 町民文芸

## 只見短歌会

令和三年一月詠草

大塚栄一

指導

馬場 八智

一人住む家の広さの寒さむと昼も明かりを灯して過ごす

関谷登美子

一人居となりし姉妹それぞれに用事の電話も長くなりきぬ

目黒 富子

生花の色褪せゆくを身に重ね白髪抜くごと枯葉を除く

渡部ゆき子

何もせずすみませんネと箸取れば病と年よと嫁は労らふ

新国由紀子

カリウムを減らす食事に悩めるも老い母気にせず果物を食む

渡部ヨリ子

豪雪で消雪の水も間に合わず屋根の落雪日ごとに溜まる

新国 洋子

東京にて広報ただみ読みしとふ友は只見を吾より明かし

(出詠順)

## 只見俳句会

二月定例会

宇多喜代子

指導

幸生

街灯をいくつ潜って雪女

鋭きもの一塊となり寒波迫る

信

閉店と貼りしガラス戸春の宵

襷のごとすくつと伸びよ卒業式

都

書初めや六才児の筆大きくて

負けん気の泣きながら取る歌留多かな

洋子

底音で山懐に鳩の吹く

細々と心揺らしてのびる立つ

味代子

廢屋のくずれし後の仏の座

冬ざれやきしむ戸音の厨口

弘子

冬晴れや墨絵の里を輝かせ

降りしきる色ありなしや窓の雪

真理子

寒茜裏山染めて夕餉かな

雪だるま漫画の話孫に聞く

睦子

除雪する夫の背中に老い感じ

雪見月夜の散歩にかけあかり

礼

除雪車の動くライトや去年今年

大皿の湯気立つ中の煮大根

一穂

春のかぜ颯門さわるなくよ

初節句曾孫の頬や内裏様

修一

どっぷりと疲れ首まで蜜柑風呂

空は青地は白にして鯨漬

